

---

# 人は結局のところ素晴らしい

吉野友哉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

人は結局のところ素晴らしい

### 【Nコード】

N3359BA

### 【作者名】

吉野友哉

### 【あらすじ】

人の心が感情の色となって見ることが出来る少年、神埼秋はある日、万引きをしようとしていた女子高生を見つける。

悪意が黒色の霧となって見えるからだ。

その女子高生の万引きを防いだ帰り道、神埼はココロスという男に遭遇する。彼は人の心の中に入ることが出来た。

それは、とても陰湿で嫌なことも知ることになる。

ココロスは神崎を襲おうとするが、突然現れた少女、夜月琴音に止められる。

琴音は世界の平和を守る者だと名乗る。

そして、神崎に

「あなたは人の心が見える。そして、いずれは人が汚れていることを知り、ココロスのように人を憎み、人類の敵となるだろう」と告げる。

自らが人類の敵になると言われた神崎はどうするのか。

神崎秋は万引きGメンという仕事は向いている。

「怪しい奴発見。真っ青になっちゃって……無理するからだ」

神崎秋はそう呟くと、目の前を通った女子高生について行くことにした。紺色のセーターに短く切られて、丈が膝の上までしかないスカート。細い脚は、冬の寒さからか青白い。ロングストレートのさらさらした髪は清楚な印象を受ける。

しかし、神崎には彼女の中に潜む小さな悪意が見えていた。

女子高生は周りを出来るだけ首は動かさずに見ていた。視線だけ動かしているつもりだろうが、注意して見れば不審な様子は隠し切れていなかった。もう終わりだと、神崎は思った。女子高生がこれから行うであろう行動が目に見えるようだった。確信とまではいかずとも、ある程度の自信があった。これから、彼女をどう調理しようかと思案する。しかし、どうということもない。自分にはそんな力は無いのだから。

神崎は苦笑して、歩を進める。女子高生が、スキンケア関連商品の前で立ち止まる。神崎は、彼女から右に数歩のところに何気なしに立った。別にどうという理由はないが、スキンケアなど、主に女性が使う商品のコーナーに手持無沙汰に立っていることは恥ずかしかった。

そんな恥ずかしさを感じながらも、神崎は横目でしっかりと彼女を捉えていた。

彼女はやる。そう思った。

彼女の周りに漂う黒い霧のようなものが、そう神崎に伝えていた。暗黒の色。悪人のイメージに似ている漆黒の霧が、女子高生の周りに漂う。ふと、視線を泳がせる。そうやって隙を作った。

一瞬のことだった。しかし、神崎は、がさり、という物が擦れる音を聞き逃さなかった。肉体的な力が無い以上は頭脳で勝負するし

かなかった。もつとも、この場合は頭脳とは知能というよりも、勘とかそう言った類の意味であるが。

神崎は持っていた日焼け止めクリームをフックに戻して、首を曲げて、左で微かに震えている女子高生を見た。女子高生は少しだけ顔を青ざめたように見えた。

その瞬間、彼女の周りに漂う霧が濃くなって、黒色から青色に変化した。透き通るような薄い霧だから、視界を遮ることはない。しかし、はつきりと、それが神崎には見えていた。女子高生の悪意の黒から、恐怖の青色に変わる瞬間を見逃さなかった。ただ、彼女の周りを漂う霧は一瞬一瞬で色が変わっている。黒から青へ変わったかと思えば、今度は赤色だ。

敵意を向けられている。神崎は声には出さずに、心の中でため息をついた。疑われている。そう思った。まるで、こちらが悪のようにしかし、神崎は決して焦ってはいなかった。彼女が性根の部分から腐った人間には思えなかったからである。

だから、神崎は小さく小鳥の囀りを意識しながら言った。

「君さ」

「えっ？」

女子高生が明らかに動揺して、神崎を見つめた。眉は下がり、唇を噛んでいる。彼女の周りの霧は紫色になった。不安なんだなと神崎は思った。

しかし、別に何もするわけでもないというのに、どうして恐れるのだろう。自分には悪を裁くなんて力は無いのに。神崎が今度はしっかりのため息をついた。

「な、何か？」

女子高生が言葉を詰まらせながら言った。神崎には自身の眼と耳を信じて、あなた万引きしたでしょうとは言うことは出来なかった。確実な証拠が無いと言うのも原因だが。だから、神崎は出来る限り、今までの人生の中で詰め込んだ小説やアニメや漫画のセリフを総動員して言った。

「やめときな。めんどいことになる」

「な、何がですか？」

女子高生が顔を逸らして誤魔化すように言った。神崎はどうしようか悩んだが無言で、彼女の鞆を指差して言った。

「それに入れたもの」

そう神崎が言うと、女子高生は顔を真っ青にして、鞆から手荒れクリームを取り出して棚に戻すと、頬を膨らませて恥ずかしそうに俯きながら、店の入り口へ駆けて行った。「顔は青ざめていても……怒ってたな」

神崎が腕組をしながら、そう頷くと、後ろから声をかけられた。

「まったく……お人よしだねえ。カバンに入れた時点で捕まえるよ」

「藤原か」

神崎は振り向き、声の主を認めると言った。神崎に藤原と呼ばれた男の名前は藤原勝也といった。神崎の高校の同級生である。

「万引きGメンは普段着なのが良いよな」

藤原が白い歯を見せながら爽やかに笑う。うつつしい。一体、何しに来たのだろうか。神崎は顔を顰めた。

「この店の安全を守っているんだ」

神崎がそう誇らしげに言うと、藤原がぶつと吹き出して言った。  
「何言っているんだよ。お前が勝手にやっているだけじゃないか。自分の変な力活かしてさ」

温かみのある肌色の霧が藤原の周りに見えた。言葉では悪く言いながらも悪意はない。そのことが神崎には手に取るように分かる。もう生まれた時から、すでに分かっていたことだ。その見えているものが異質なもので、普通でないことと知るには、しばらく時間がかかったが。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3359ba/>

---

人は結局のところ素晴らしい

2012年1月8日19時54分発行